

その年の駒場祭開催時に、学生委員長を仰せつかっているものが、教養学部報に駒場祭についての報告ないし感想文を書くことが慣例であるらしい。行事は毎年続くが、駒場祭委員会(KFC)のメンバーも学生委員会のメンバーも年ごとに入れ替わる。そこで繰り返される報告文には、どの程度の多様性があるのだろうか。過去の例をたどってみようと思いつながら、怠慢にして先延ばしているうちに、締切が来てしまった。

締切日は、絶妙に設定されている。今年(1995年)の駒場祭は11月24-26日開催であるが、それが明けた27日(月)が指定日だ。したがって、駒場祭当日、外を流れるロックバンドの演奏音を聞きながら、机に向かうという次第となる。

今年の駒場祭は、天気恵まれている。それに誘われてか、入場者数も昨年より多く、5万人を超える見込みらしい(最終的な数字は、3日間の総計が5万5千人とのこと)。企画の数は370。これだけの規模のイベントを準備するために、KFCが注ぐエネルギーたるや膨大なものである。そのプロセスに全精力を費やして、祭の当日はただ無事終了することを祈るばかりのように想像される。もちろん、終わった後の達成感は何にもものにも代え難いだろう。

企画の場所の割り当て、時間割作成、資材・機器の準備や運搬、交通規制、衛生、清掃、防犯、防災、等の管理計画と実行、等をぬかりなく進めるには、マニュアルがいる。実際、これらの処理体制はよくマニュアル化されているようだ。なにも、近頃の若者をマニュアル人間と揶揄することに与する意図では決してない。毎年を経験を引き継ぎ、それを整備して文書化する努力には、敬意を惜しまないつもりである。

昔はどの大学の文化祭も、統一テーマを掲げて全体として社会にメッセージを送ろうという姿勢を示した。しかし、いつの頃からか(あるいは初めからかも知れないが、初めがいつかが分からない)形式化し、祭を楽しむ多くの参加者には無縁のものとなったのだろう。例の「止めてくれるなおっ母さん、背中の銀杏も泣いている」というセリフが、そのような形骸化した統一テーマに引導を渡した。それもすでに20年以上前の話である。こうして祭の運営は機能化し、マニュアルにふさわしいものになったのも、自然のなりゆきだろう。

しかし、マニュアルはともすればマンネリと通じるかもしれない。今回、KFCと学生委員会との事前の折衝でもっとも問題となったのは、7号館の一部の教室使用についてであった。昨年(1994年)まで、723、724番教室を文三劇場という演劇企画が例年使っており、そのために教室前方の机と椅子の一部を取り外してステージを設営していた。しかし、この年の初めに、教室の机や椅子が老朽化し不安定なのを改善する目的で、新しいものと入れ換えるとともに、床に固定する工事が行なわれた。昨年の駒場祭では、この変更に対応する準備期間が不足であるという理由で、固定された机と椅子の一部を駒場祭期間中取り外すという特別措置をとった。その際、「この取り外しは今年度限りとする」という文書を、第45期(つまり1994年度)KFCが提出している。そして、1995年度については、別の方法をKFCが考えるということになっていた。ところが、今年の6月に第46期KFCが出してきた要求書に、再び7号館の教室の机、椅子の取り外し要求があったのには、いささか

あっけにとられた。検討したが、他に適当なところが見つからなかったという。

われわれは、900番教室と南ホールはどうかと提案した。ところが、900番は広過ぎて素人の役者では声を通らないとか、南ホールは駒場寮の一部なので、廃寮となる次年度以降使える見通しが無いのが問題、という。この辺に、とにかく毎年同じような形でやりたいという意識が、強く現れている気がした。素人がやる劇だからこそ、伝統的な舞台装置、照明設備などに固執せず、自由に様々な可能性を考えてみたら面白いのではないかと試してみたが、はかばかしい反応はない。

結局この問題は、1号館の机と椅子が動かせる教室を使うことで決着した。ただ、吊り下げ式の天井灯が照明の邪魔なので、直付けにするという工事を行なうことを大学側が了承したという経緯である。

筆者は駒場に来て日が浅いので、知らないがゆえに新鮮に感じることもままある。たとえば、駒場祭という学生が主催する祭に、教職員がこれほどつき合うものとは想像外だった。とくに、準備期間も含めて、学生課の職員の方々の負担は並大抵でない。駒場祭開催中は、何人もが連続して泊まりである。正直なところそこまでやる必要があるのかと感じたが、実際、一日目の夜も、二日目の夜も、1号館の火災報知器をいたずらで鳴らすという事件が、それぞれ2回ずつ起こった。職員の方々が泊り込んでいるのは、万一火災などの事故が発生した場合への対処に他ならない。そのような事態になれば最終的な責任は大学にあるからである。それをいたずらでやられては、たまらない。駒場祭期間中、1号館など企画で使われている建物を夜間開放し学生の管理に任せているのは、考え直さなければいけないかもしれない。それをやめれば、学生課の方々が泊り込む必要もなくなるのではないかと。

駒場祭と並行して、駒場寮の寮祭も行なわれる。そもそも一高時代からの寮祭が駒場祭の起源なのだそう。駒場寮は1996年3月末で廃寮となるので、これが最後の寮祭となる。最後の寮祭にしては記念行事のようなことは行なわれなかったようだが、特別の感慨を持つ関係者も多いのではないだろうか。

主に運営側のことを書いてきたが、演奏、演劇、模擬店、その他の出し物の主催者や、一般の参加者の顔を見れば、皆一様に楽しそう。訪れる人の中には若い男女ばかりでなく、家族姿も混じる。実は、筆者も2日目の昼に家族を呼んで、少し一緒に歩いてみた。買った団子が焦げていたり、あんこがよくついていなかったりするの、ご愛敬というものである。